

歴史探訪

クラブ! 其の190

History Inquiry Club



文化財課 ☎22-1720
(博物館) FAX 22-2028

「日本一」の農業を作った人々

「農業日本一」と呼ばれるほど、本市の農業は発展しています。しかし、本市でなぜこれほどまでに農業が発展したかということはあまり知られていません。一つの理由としては豊川用水の通水が挙げられますが、実はそれ以上に重要な理由がありました。

本市が位置する渥美半島は水が少なく、その上、強い酸性の土壌で作ることのできる作物が限られています。

した。昭和30年の「農業センサス」を見ると夏作の約75%がサツマイモ、冬作の約80%が麦でした。当時の人々は今の農家のように作りたい作物を作るのではなく、渥美半島の水と土で作ることができない作物を作るといって、厳しい制約を抱えながら、農業を営んでいました。

そのような状況の中、新しい技術を導入することで、高い付加価値を持った農業をこの渥美半島で行うことを考えた人がいました。それが小塩津の研究熱心な農家であった岡田儀八ぎはちです。昭和初期の渥美半島では芋や麦という安価な作物の埋め合わせのために、桑畑を作り、養蚕業ようさんを営むことで現金収入を得ていました。しかし、生糸は過剰生産や需要



▲施設園芸の導入に尽力した岡田儀八

の落ち込みの影響によって価格の暴落があり、安定した収入にはならず、さらに、この地域以外にも代わりはいくらでもあるものでした。そのため、儀八は養蚕業の代わりとなる渥美半島ならではの新しい作物を作らなければ渥美半島の農業には先が無いと考えたようです。

そこで儀八は、渥美半島の温暖な気候に着目し、温室を利用した施設園芸に可能性を見いだしました。すでに先行して施設園芸を営んでいた豊橋の農家の下へ弟を弟子入りさせ、温室栽培と温室建設の技術の小塩津へ導入しました。その結果、儀八はわずか1年で温室の建設費を取り戻すほどの収益を上げました。これをきっかけにして、渥美、赤羽根地域の農家は施設園芸を積極的に取り入れ、熱心に研究を始めました。

地元の施設園芸への熱意を受けて、県や渥美郡、地元の有志と共同で、昭和27年に和地に「渥美郡暖地園芸試験場」が発足されました。この試験場は、渥美、赤羽根などの農業を志す若者たちを練習生として受け入れ、菊の栽培密度や電照菊の品種選定、露地栽培作物の選定な



▲渥美郡暖地園芸試験場

ど、これまで、個人の経験によるところが大きかった知識を体系的にまとめ、練習生たちに伝えました。付加価値の高い農業を行う上での基礎知識を得た若者は、自ら農業を営んでいく中でその知識を深化させ、独自の競争力を獲得していききました。昭和43年の豊川用水の通水後、渥美半島の農業は大きく発展します。7年後には日本の生産農業所得の1〜3位を赤羽根町、渥美町、田原町で独占するまでになりました。この結果の背景には、将来を見据え、新しい農業に挑戦し、技術を開発していった儀八をはじめとする先人たちの存在があったのです。(山本)